

教 育 研 究 業 績 書

2025年 5月 1日

氏名 宮 本 浩 尊

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
1. 哲学	1)中国哲学・印度哲学・仏教学	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
①大谷大学		
1)「般若経を読む」の学生教育指導	平成20年9月	『八千頌般若経』の読解を通して仏教思想の主要な概念を理解することを目指した。この授業は、真宗大谷派教師課程に充当する授業であったため、仏教学の方法論を知らない学生が多く受講していた。そのため、仏教学の方法論を丁寧に伝えることを試みた。
2)「仏教学特殊演習」の学生教育指導	平成20年9月	青目著『中論』の読解を通して、般若思想・空思想など大乘仏教の主要な概念を原典に基づいて理解することを目指した。
3)「専門の技法」の学生教育指導	平成21年9月	大谷大学文学部仏教学科の第1学年を対象とした必修科目である。仏教学の研究方法と、仏教の歴史を理解することを目指した。
4)「仏教学特殊演習」の学生教育指導	平成22年4月	青目著『中論』の読解を通して、般若思想・空思想など大乘仏教の主要な概念を原典に基づいて理解することを目指した。
5)「専門の技法」の学生教育指導	平成22年9月	大谷大学文学部仏教学科の第1学年を対象とした必修科目である。仏教学の研究方法と、仏教の歴史を理解することを目指した。
6)「般若経を読む」の学生教育指導	平成23年4月	『八千頌般若経』の読解を通して仏教思想の主要な概念を理解することを目指した。この授業は、真宗大谷派教師課程に充当する授業であったため、仏教学の方法論を知らない学生が多く受講していた。そのため、仏教学の方法論を丁寧に伝えることを試みた。
7)「仏教学特殊演習」の学生教育指導	平成23年9月	青目著『中論』の読解を通して、般若思想・空思想など大乘仏教の主要な概念を原典に基づいて理解することを目指した。
②札幌大谷大学		
1)「仏教文化史」の学生教育指導	平成26年9月 ～平成28年3月	文化を構成する要素として「ことば」に注目し、仏教の「ことば」が開祖釈尊以来、どのように展開していったのかを理解することを目指した。
2)「建学の精神と大谷学」の学生教育指導	平成27年9月	札幌大谷大学・短期大学部の「建学の精神」の内容を確認し、その背景にある仏教の思想史を理解することを目指した。また、札幌大谷大学・短期大学部で学ぶことの意義について理解を深めた。
3)「仏教思想史特論Ⅱ」の学生教育指導	平成28年9月	仏教の開祖釈尊のことばに直接触れるために『スッタニパータ』の現代語訳を読み、また浄土真宗の開祖親鸞のことばに直接触れるために『歎異抄』の現代語訳を読んだ。これによって、仏教思想の特徴を理解し、古典を読むことで先人の知恵を知ることを目指した。

事 項	年月日	概 要
4)「仏教人間学」の学生教育指導	平成29年9月 ～令和4年3月	2500年前のインドに始まる仏教思想について開祖釈尊の思想を確認した上で、インドでの思想的展開と、中国・日本への仏教伝来、そして親鸞の思想について体系的に理解することを目指した。
5)「建学の精神と大谷学a, b, c」の学生教育指導	令和4年4月	札幌大谷大学・短期大学部の「建学の精神」の内容を確認し、その背景にある仏教の思想史を理解することを目指した。また、札幌大谷大学・短期大学部で学ぶことの意義について理解を深めた。
6)「仏教と保育」の学生教育指導	令和4年9月 ～現在	札幌大谷大学・短期大学部において幼児教育を学ぶ学生に対して「建学の精神」の内容を確認し、その背景にある仏教の思想史を理解できるように勤めている。その中で、仏教が「人間」がより良く生きるための手掛かりとなる思想であることを学生に伝えることを意識している。
7)「仏教思想史特論Ⅰ」の学生教育指導	令和4年4月 ～現在	仏教の開祖釈尊の生涯と思想、インドにおける展開史を学ぶことを通して、インド仏教の思想について理解を深めることができるよう努めている。
8)「仏教思想史特論Ⅱ」の学生教育指導	令和4年9月 ～現在	インドで誕生した仏教が、東アジアに伝播していく様子を中国、日本の歴史を踏まえながら確認している。日本文化の背景に仏教の思想が強く影響を及ぼしていることを伝えることを意識している。
9)「仏教文化史」の学生教育指導	令和4年9月 ～現在	文化を構成する要素として「ことば」に注目し、仏教の「ことば」が開祖釈尊以来、どのように展開していったのかを理解することを目指している。
10)「建学の精神と大谷学Aa, Ab, Ac」の学生教育指導	令和5年4月 ～現在	札幌大谷大学・短期大学部の「建学の精神」の内容を確認し、その背景にある仏教の思想史を理解することを目指した。また、札幌大谷大学・短期大学部で学ぶことの意義について理解を深める。 その中で、仏教が「人間」がより良く生きるための手がかりとなる思想であることを学生に伝えることを意識している。
11)「建学の精神と大谷学B」の学生教育指導	令和5年9月 ～現在	2500年前のインドに始まる仏教思想について開祖釈尊の思想を確認した上で、インドでの思想的展開と、中国・日本への仏教伝来、そして親鸞の思想について体系的に理解できるよう努めている。
2 作成した教科書，教材		
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事 項	年月日	概 要
1 資格，免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(学術論文) 1. 『般若灯論』第15章における清弁の言説 諦理解—『俱舍論』にお ける経量部説と関連し て—	単著	平成17年	『印度学仏教学研究』第 54巻第1号, pp. 80-83.	『般若灯論』第15章を中心として、 清弁の思想に経量部的思想の影響が 見られることを指摘した。 清弁は、勝義において一切法の無 自性を主張する一方で、世俗におい ては、一定の存在の実在性を世俗有 として認めた。 本論文では、特に説一切有部の三 世実有説に対する批判の内容を整理 し、清弁の立場が『俱舍論』におけ る世親のいわゆる経量部的立場とよ く一致することを明らかにした。
2. パーヴィヴェーカの 実有論批判とその思想 的背景	単著	平成18年	『印度哲学仏教学』 第21号, pp. 63-77.	『般若灯論』第15章に見られる清 弁のサーンキヤ学派批判の内容を整 理した。 清弁は、サーンキヤ学派の転変説 を批判の対象とするが、そのとき、 世俗として未顕現の事物の存在を認 めず、顕現した事物の存在のみを世 俗有として承認した。 このような清弁の世俗における立 場は、『俱舍論』における世親のい わゆる経量部的思想とよく一致する ことを明らかにした。
3. 『大乘掌珍論』にお ける認識を巡る議論	単著	平成19年	『大谷大学大学院研究 紀要』第24号, pp. 55-81.	清弁著『大乘掌珍論』を資料とし て、清弁の論理学的特徴と、瑜伽行 学派批判の内容を検討した。 これによって、従来、江島恵教氏 が清弁の主著『中観心論』及び『般 若灯論』によって明らかにした内容 を傍証することができた。 また、清弁の瑜伽行学派批判の方 法論が世親著『俱舍論』、陳那著『集 量論』に見られる認識論的議論と相 関関係にあることを指摘することに よって、清弁の思想の歴史的背景の 一端を明らかにした。
4. パーヴィヴェーカに おける直接知覚と自性 分別—『大乘掌珍論』を 中心として—	単著	平成20年	『印度学仏教学研究』第 56巻第2号, pp. 141-145	清弁による直接知覚という概念に 対する理解について検討した。 陳那にとって直接知覚は、推理と 共に確実な認識手段の支分として定 義されている。これに対して、清弁 は、直接知覚を世間的常識と共に世 俗有を規定する条件として位置づけ ていた。 本論文では、清弁による直接知覚 に対する定義の背景に、『俱舍論』に 見られる自性分別という概念が有る ことを論証した。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
5. バーヴィヴェーカの認識論- 二諦説に依拠した分別知と無分別知の設定-	単著	平成 22 年	『印度哲学仏教学』第 25 号, pp. 249-236.	清弁著『般若灯論』を主な資料として、清弁の認識論の背景を検討した。 従来、清弁の認識論では陳那の認識論との比較研究がなされてきたが、本論文では、瑜伽行学派の三性説との関係性を考察することによって、清弁の認識論が、衆生の知と仏陀の智慧との違いを明確化しようとする試みであったことを明らかにした。
6. バーヴィヴェーカによる瑜伽行学説批判の思想的背景	単著	平成 22 年	『仏教学セミナー』第 91 号, pp. 1-18.	清弁著『般若灯論』を主な資料として、清弁の瑜伽行学派批判の背景を検討した。 近年の研究で、清弁は、いわゆる「中観学派」の開祖と位置づけられている。それは、龍樹の思想が中観学派のみならず、瑜伽行学派の思想的背景になっているからである。 本論文では、清弁が、瑜伽行学派による龍樹の思想理解を否定することを通して、自らの思想を構築していることを論証した。
7. 中観学派と瑜伽行学派の対論とその意義 - 『般若灯論』第 25 章を中心として -	単著	平成 23 年	博士論文 (大谷大学)	思想研究と翻訳研究から成る。 翻訳研究では、清弁著『般若灯論』第 25 章と、その復註『般若灯論広註』第 25 章の翻訳を行った。 当該章は、清弁の思想形成を知る上で重要な章である。しかし、これまで完全な翻訳は存在しなかった。それ故、この翻訳が世界初となる現代語訳である。 思想研究では、第 25 章の構造、瑜伽行学派批判の構造を体系的に考察し、清弁による瑜伽行学派批判の実態を明らかにした。
8. 諸仏称名	単著	平成 27 年	第 14 期北海道教学研究 所 研 究 レ ポ ー ト , pp. 74-79.	親鸞著『教行信証』の「行巻」を主な資料として、『無量寿経』に説かれる本願文のうち第 17 願に対する親鸞の理解について考察した。
9. 仏心相応の信心	単著	令和元年	第 15 期北海道教学研究 所 研 究 レ ポ ー ト , pp. 32-37.	親鸞著『教行信証』の「信巻」を主な資料として、『無量寿経』に説かれる本願文のうち第 18 願に対する親鸞の理解について考察した。
10. 現生正定聚―慶喜と悲嘆の間―	単著	令和 5 年	第 16 期北海道教学研究 所 研 究 レ ポ ー ト , pp. 27-35.	親鸞著『教行信証』の「信巻」と「証巻」を主な資料として、「現生正定聚」という概念について考察した。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(口頭発表) 1. 『般若灯論』第15章における清弁の言説諦理解—『俱舍論』における経量部説と関連して—	単著	平成17年	日本印度学仏教学会第56回学術大会	『般若灯論』第15章を中心として、清弁の思想に経量部的思想の影響が見られることを指摘した。 清弁は、勝義において一切法の無自性を主張する一方で、世俗においては、一定の存在の実在性を世俗有として認めた。 本発表では、特に説一切有部の三世実有説に対する批判の内容を整理し、清弁の立場が『俱舍論』における世親のいわゆる経量部的立場とよく一致することを明らかにした。
2. パーヴィヴェーカの実在論に関する一考察	単著	平成17年	北海道印度哲学仏教学会第21回学術大会	『般若灯論』第15章に見られる清弁のサーンキヤ学派批判の内容を整理した。 清弁は、サーンキヤ学派の転変説を批判の対象とするが、そのとき、世俗として未顕現の事物の存在を認めず、顕現した事物の存在のみを世俗有として承認した。 このような清弁の世俗における立場は、『俱舍論』における世親のいわゆる経量部的思想とよく一致することを明らかにした。
3. パーヴィヴェーカの無自性論に関する一考察	単著	平成19年	日本印度学仏教学会第58回学術大会	清弁による直接知覚という概念に対する理解について検討した。 陳那にとって直接知覚は、推理と共に確実な認識手段の支分として定義されている。これに対して、清弁は、直接知覚を世間的常識と共に世俗有を規定する条件として位置づけていた。 本発表では、清弁による直接知覚に対する定義の背景に、『俱舍論』に見られる自性分別という概念があることを論証した。
4. 無分別智を巡る中観学派と瑜伽行学派の論争—パーヴィヴェーカによる瑜伽行学説批判の一考察	単著	平成19年	大谷大学仏教学会研究発表例会	清弁著『大乘掌珍論』を資料として、清弁の論理学的特徴と、瑜伽行学派批判の内容を検討した。 これによって、従来、江島恵教氏が清弁の主著『中観心論』及び『般若灯論』によって明らかにした内容を傍証することができた。 また、清弁の瑜伽行学派批判の方法論が世親著『俱舍論』、陳那著『集量論』に見られる認識論的議論と相関関係にあることを指摘することによって、清弁の思想の歴史的背景の一端を明らかにした。

著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
5. パーヴィヴェーカの 認識論—二諦説に依拠 した分別智と無分別智 の設定—	単著	平成 21 年	北海道印度哲学仏教学 会第 25 回学術大会	清弁著『般若灯論』を主な資料として、清弁の認識論の背景を検討した。 従来、清弁の認識論では陳那の認識論との比較研究がなされてきたが、本発表では、瑜伽行学派の三性説との関係性を考察することによって、清弁の認識論が、衆生の知と仏陀の智慧との違いを明確化しようとする試みであったことを明らかにした。
6. 依他起性の実在性を 巡る中観学派と瑜伽行 学派の論争—パーヴィ ヴェーカによる瑜伽行 学説批判の一考察—	単著	平成 21 年	大谷大学仏教学会研究 発表例会	清弁著『般若灯論』を主な資料として、清弁の瑜伽行学派批判の背景を検討した。 近年の研究で、清弁は、いわゆる「中観学派」の開祖と位置づけられている。それは、龍樹の思想が中観学派のみならず、瑜伽行学派の思想的背景になっているからである。 本発表では、清弁が、瑜伽行学派による龍樹の思想理解を否定することを通して、自らの思想を構築していることを論証した。